

お持たせ

新年1月。年賀の品や手土産持参で、あいさつに出かける人もいるだろう。新型コロナウイルスの影響を受ける前なら、「お持たせで恐縮ですが……」などと言いながら、客が持参した物を訪問先の主がさっそく開けて、皆で食べるというやりとりもあったかもしれない。

この「お持たせ」ということばをはじめで知ったころ、少々めずらしいタイプの尊敬語だと不思議に感じたものだ。「『お持たせ』とは、誰が誰に『持たせる』のか?」と、しばらく考えてしまった記憶がある。現代語の感覚で、「お持たせ」の「せ」が「(人に)～させる」という使役の意味であるなら、尊敬語には似つかわしくないと感じたからかもしれない。

「お持たせ」は、「お持たせ物」が略されたことばのようだ(例:『日本国語大辞典2版』(小学館))。「お持たせ物」とは、「(客が手ずから)お持ちになった物」(尊敬)、「(客が使いや従者などに)持たせた物」(使役)(例:『日本大辞典 言葉』(大倉書店))。「お持たせ」の「持たせ」の部分の品詞と意味については、いくつかの考え方があろうのだが、すなわち、「(客側に)お持ちいただいた物」「(客からの)いただき物・お土産」の意味だ。

なるほど、使役は使役でも、「(客に)持ってこさせた物」ではなく、「(客が(使いの者に))お持たせになった物」、もしくは「(客が)お持ちになった物」という尊敬の意味なのか!と、合点がいった。

最近ではこのことばを、訪問される側の「いただき物」の意味ではなく、訪問する側が「手土産」の意味で使うことも増えているようだ。「大切な方へのお持たせに……」「お持たせにしたいおすすめお菓子」などといった例も、多く見られる。「手土産」「お土産」などの日常的なことばとは、ひと味ちがう類語として重宝される場面も増えつつあるようだ。

主な国語辞典では、最新版でも、訪問者側のことばとして使うのは本来は誤りであるとしているものがあり(例:『明鏡国語辞典3版』(大修館書店))、現代語としては、この意味での用法は伝統的とはいえないようだが、いかがあいなるか。今後の動きが気になるところだ。

年賀用の品が店頭に並ぶこの季節。「お持たせ」として喜ばれそうな「手土産の品」の試食に精を出すのをコロナ後の楽しみとしつつ、「お持たせ」の、これまでとこれからについて考えてみるのも一興だ。

本多 葵(ほんだ あおい)